

第11回 国際日本学シンポジウム

日時	2009年7月4日(土)・5日(日)
場所	お茶の水女子大学 (〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1) 理学部3号館701号室
テーマ	【4日】日本近世港町の社会・文化構造 【5日】日仏交流の中のテキスタイル～明治時代から今日まで～ —技術、デザイン、コレクション—
主催	お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター 大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」 女性リーダー育成プログラム(人社系)

プログラム	
7月4日(土) 第1日目 [Session1] 日本近世港町の社会・文化構造	
13:00-17:00	<p>【司会】神田由築(お茶の水女子大学 准教授) 【挨拶】河村哲也(お茶の水女子大学 副学長)</p> <p><研究発表> 「オランダ商館長の江戸参府と鞆の浦」 矢田純子(お茶の水女子大学大学院 博士後期課程) 「近世福山藩領における保命酒生産と鞆町の社会」 後藤雅知(千葉大学 准教授) 「尾道の仲背と仲間」 森下徹(山口大学 教授) 「近世後期徳島城下近郊における『胡乱人』対策と四国遍路」 町田哲(鳴門教育大学 准教授)</p>
17:30-18:30	茶話会
7月5日(日) 第2日目 [Session2] 日仏交流の中のテキスタイル～明治時代から今日まで～ —技術、デザイン、コレクション—	
10:30-12:00 【午前の部】	<p>【司会】秋山光文(お茶の水女子大学 教授) ロール・シュワルツ＝アレナレス(お茶の水女子大学 准教授)</p> <p><公開講演会> 「日仏交流の中のテキスタイル：ジャポニズムとモードの視点から」 深井晃子(京都服飾文化研究財団 チーフ・キュレーター 理事)</p>
13:00-18:00 【午後の部】	<p>【司会】秋山光文(お茶の水女子大学 教授) ロール・シュワルツ＝アレナレス(お茶の水女子大学 准教授)</p> <p><研究発表> 「ギメ美術館蔵クリシュナ・リブー日本織物コレクション：その研究と保存」 オーレリー サミュエル(ギメ美術館 クリシュナ・リブー織物コレクション担当) 「染型紙とジャポニズム」 高木陽子(文化女子大学 教授) 「メッセージ媒体としての現代スカーフ： アクセサリーに映し出された20世紀—ガリエラ美術館コレクション—」 円谷智子(パリ第1大学 大学院生) 「染織とグローバリゼーション：アンディエンス(更紗)からジャポニズムへ」 廣瀬緑(パリ第7大学 准教授)</p> <p><パネルディスカッション> 【司会】徳井淑子(お茶の水女子大学 教授)</p>

【Session 1】日本近世港町の社会・文化構造

今年で11回を数える本学の国際日本学シンポジウムの特徴のひとつは、国際性・学際性にある。そこで、国際性・学際性を貫く「交流」というキーワードをもとに日本近世の港町にスポットをあて、その社会・文化構造の解明を通じて、ヒトやモノの交流がある社会にどのような影響をおよぼしてゆくのか、その具体像に迫ることをねらい、セッションI「日本近世港町の社会・文化構造」を立てた。

日本近世の港町は、ヒト・モノや情報が交流する拠点として、ひとつの都市類型を進化させてきた。近年の都市史研究においては、たとえば本セッションの報告者も関わっている「身分的周縁論」や、都市史研究会の諸活動などを通して、都市内部における社会的結合や社会的諸関係に注目した研究が次々と成果をあげている。2006年に発足した科学研究費基盤研究(S)「16-19世紀、伝統社会の分節的な社会＝空間構造に関する比較類型論的研究(通称とらっど3)」の活動もそのひとつである。

本セッションでは、これらの研究成果をふまえ、社会的結合や諸関係の展開過程において、都市と都市との交流はどのように形成されていったのか、あるいは逆に、港町のような、ヒトやモノ・情報の交流の拠点である都市では、どのような社会的結合が取り結ばれていったのか、といった点に注目した。そして、港町独自の社会・文化構造を明らかにしながら、近世都市の特質を考察することを意図している。

なお、文化構造と銘打っているが、たしかに報告のなかには芸能や陶器といった直接的に文化活動に関わる話も出てくるが、セッション全体としては、ある地域に生きる多様な集団の生きざまそのものを広義の文化とみなして、港町を基盤に活動する人びとの活動総体をとらえたいと思っている。

当日の進行は、はじめに四本の個別報告を行い、その後相互の論点を確認するためのディスカッションを設けた。四本の個別報告は、いずれも瀬戸内海地域にフィールドを設定している。これは、同地域が近世以前よりヒト・モノ・情報が交流する要衝だったことと、そのことで近世には多くの港町を発展させ、それら都市相互の交流を基盤に成熟をとげた地域だったことから、格好の素材として選択したためでもある。

以下、報告の概要を簡単に紹介する。一つ目の矢田純子氏報告「オランダ商館長の江戸参府と鞆の浦」と二つ目の後藤雅知氏報告「近世福山藩領における保命酒生産と鞆町の社会」は、いずれも備後国鞆の浦を取り上げている。鞆の浦は、古くから知られた良港で、しかも今なおその貴重な歴史的景観を保持している点で、まれにみる文化的遺産である。これまで歴史学よりも建築史や環境社会学といった分野で、おもに町並み保存や都市デザインなどの観点から注目されてきたが、この機会に、近世都市としての鞆の浦の社会構造に関する本格的な分析を行うことも意味があると考え。今回の報告がその一助となれば幸いである。

三つ目の森下徹氏報告「尾道の中背と仲間」は、鞆の浦とも関係の深い尾道をフィールドに、中背という社会集団を取り上げている。中背を通じた港町間の交流や、中背を取り巻く社会集団の成熟などが浮かびあがった。

四つ目の町田哲氏報告「近世後期徳島城下近郊における『胡乱人』対策と四国遍路」は、徳島藩の「胡乱人」対策を通して、徳島城下に集う人びとの社会的実態を追究して、そのなかで四国遍路の問題をとらえようとする。直接のフィールドは港町ではないが、四国遍路は瀬戸内地域(とくに四国内)の各地を結ぶ回國者の代表でもあり、それを藩の領内統制と絡めて描くことで、こうした“移動する人びと”を抱え込む都市社会の構造的特徴が見えてくる。本セッションの結びにふさわしい報告であった。

ディスカッションでは、鞆の浦から地元の方々を迎え、フィールドに根ざした港町の社会構造のさらなる解明が今後の課題として確認されたことがひとつの大きな成果である。また、矢田報告で紹介されたオランダ商館長一行の旅程は、瀬戸内海の潮の流れからみて信憑性があるとの貴重な指摘もなされた。

この他、歴史学・民俗学の分野から専門的な発言を得たことも成果である。これら質疑応答を通じて、幕末まで身分社会のロジックが展開したこと、遍路の問題などについては民俗学の成果も参考になるであろうこと、などが明らかになった。

以上、本セッションで展開された港町を行き交うさまざまな人びとの具体的な活動を通して、近世都市の社会・文化構造や人々の交流のありかたが少しでも展望できれば幸いである。

【文責：本学准教授 神田 由築】

【Session 2】日仏交流の中のテキスタイル～明治時代から今日まで～技術、デザイン、コレクション～

本シンポジウムの目的は、日本とフランス（あるいはヨーロッパ）との交流のなかで、テキスタイルがどれほどの文化的役割を果たしたのかを問うことであった。東西のテキスタイルが、ときどきの社会・経済を背景とし、芸術・習俗との関わりにおいてどのように展開し、相互に受容されたのか、講演者および研究発表者から最新の研究調査が報告され、染織・服飾史研究者にとっては特に多くの情報と新たな視座を与えられる会合であった。報告の最後に行われたパネルディスカッションでは、会場から広範な質問を受け、質疑を通してテキスタイルの社会・文化表象としての意味が明らかになるとともに、コレクション収集に関わる諸問題が浮き彫りにされ、意義深い研究会となった。

深井晃子氏による講演は、西洋における日本服飾の受容を体系的に示し、造形原理の変更を迫る影響を及ぼしたこと、その背景に政治・経済など重層的な日本への関心のあったことを指摘するものだった。ゆえにパネルディスカッションでの質問は服飾造形の問題に集中し、ジャポニズムの介在によるヨーロッパの身体意識の変化、あるいはポワレやヴィオネの造形性との関わりに議論が及んだ。同じ 19 世紀後半の事象として、廣瀬緑氏からは、ミュールーズ染織美術館蔵の日本様式の織物図案の典拠が日仏の記録によって裏付けられること、また日本に向けてこれらの織物が輸出されたという興味深い報告がなされたが（筆者が代読）、氏の来日がかなわなかったため、質問を受けることができなかったのは残念であった。装飾意匠の問題は、さらに高木陽子氏の染型紙に関する調査と円谷智子氏のスカーフに関する調査によって新たな事象が加えられた。染型紙が観賞用として西洋で受容され、工芸・建築の装飾意匠として展開したことを明らかにした高木氏の報告には、日本から流出し、ヨーロッパで染型紙のコレクションが創設された経緯、あるいは日本における収蔵を問うものが多かった。一方、パリのガリエラ美術館蔵のスカーフを対象に、デザインの日仏比較を行い、プロパガンダとしてのスカーフの意匠を明らかにした円谷氏の報告には、プロパガンダ・デザインの生成の問題、風呂敷の意匠との関連、さらに横浜スカーフの織の技法に質疑が及んだ。そして、ギメ美術館のオーレリー・サミュエル氏からは、クリシュナ・リブー・コレクションのなかで 600 点を占める日本の染織品について、遺品の歴史的背景はもちろん、リブー氏の織物研究に対する哲学や美術館の調査にいたるまで、行き届いた紹介が行われた。袱紗、型紙、袷裳、内掛から修験者の鈴懸やアイヌのアットゥシまでを含むこの広範なコレクションについては、その収集規範、あるいは遺品の使用者の記録による同定など美術館の調査について質問が出された。

パネルディスカッションを通して、本シンポジウムの二つの意義がより鮮明になったと思われる。一つはコレクションの問題である。染織遺品や染型紙など、日本の文化財の豊かなコレクションがヨーロッパに存在し、またギメ美術館、ミュールーズ染織美術館、ガリエラ美術館などのテキスタイル・コレクションの存在が再認識されるとともに、この領域におけるコレクションの収集規範の問題が浮上したことは成果であった。二つ目は、当然のことながら異文化接触の問題にジャポニズムが好事例となることを確認できたことである。異なる文化が接触することにより新しい文化が創造されることは言うまでもないが、ジャポニズムはそれを検証するためのきわめて良い事例である。日本では捨てられる型紙が鑑賞として訴えるちからをもち、日本のモードは新たなヨーロッパ・モードを生み出す原動力となった。ローカルな文化がグローバルな影響を及ぼしうる可能性を、日仏交流という枠のなかで、しかもテキスタイルという対象に絞りながらも、本シンポジウムは明快に教えてくれたように思う。リブー氏が、ある文明を知るには、そこから生み出された織物を調査することに勝るものはないと語られたというサミュエル氏の報告は示唆多い。

最後に、テキスタイル研究の一端を担うものとして、このようなテーマを企画くださったロール・シュワルツ＝アレナレス先生と秋山光文先生をはじめ、比較日本学教育研究センターのみなさまに感謝を申し上げ、またパネルディスカッションを支えてくださった大学院教育改革支援プログラムのみなさまと、通訳を担当くださった梶浦彩子氏にお礼を申し上げる。

【文責：本学教授 徳井 淑子】

本セッションは、「横浜開港及び日英修好通商条約締結 150 年を機に、日本とヨーロッパにおける美術とモードの変革に、絹織物あるいは広く織物（テキスタイル）が果たした役割に着目する。明治期日本での紡績技術の普及におけるフランスの先駆的行動を見直し、テキスタイルの図案や相互影響といった点から、ジャポニズムの時代から今日までの日仏相互の美術交流の歴史を辿りたい。その多様で豊かな相互関係を浮き彫りにするために、テキスタイル・アートの技術、デザイン、コレクションを検証しながらこの問題に取り組んでいく。」との趣旨をもとに、ロール・シュワルツ＝アレナレス准教授が企画立案し、テーマに沿った研究発表が可能な内外の研究者と連絡を取ることからスタートした。

フランスから参加を表明していただいたのはオーレリー サミュエル氏（ギメ美術館クリシュナ・リブー織物コレクション担当）、廣瀬緑氏（パリ第 7 大学、准教授）、円谷智子（パリ第 1 大学博士課程）の諸氏で

あり、徳井淑子教授のご紹介によって本学の出身者でもある高木陽子氏（文化女子大学教授）と全体を見通す基調講演者として深井晃子氏（本学名誉博士、京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）にも参加していただけたこととなった。

セッション当日の様子については、徳井教授、シュワルツ＝アレナレス准教授の報告に詳しいが、廣瀬緑氏が体調不良によりシンポジウム開催直前になって参加を見送られたことにより、徳井教授が原稿を代読するという不測の事態はあったものの、本セッションを無事に終了できたことは、関係者の一人として喜びに堪えない。さらに、締め切りまで1ヶ月余という短期間であったにも拘わらず、発表者諸氏からは報告書の原稿が期限までに届けられたことにより、報告書の発行も順調に進められることになろう。ここに改めて皆様のご協力に深く感謝申し上げたい。

今回のセッションに関しては、企画者のシュワルツ＝アレナレス准教授の着想の豊かさや内外の研究者に関するネットワークの広さ、セッション遂行に向けての驚異的な献身ぶりに負うところが少なくない。さらに、全体パネルディスカッションの司会ばかりでなく、参加を取りやめられた廣瀬氏の原稿代読という役まで引き受けてくださった徳井淑子教授にもお礼を申し上げたい。最後に、当日の会場運営の補助として活躍していただいた比較日本学教育研究センターのスタッフの皆さん、大学院教育改革支援プログラムのメンバーの方々、通訳を担当していただいた梶浦彩子氏にも心より謝意をお伝えしたい。

【文責：本学教授 秋山 光文】

明治時代以降の日仏交流におけるテキスタイルの役割について、技術的、美学的な観点、及びコレクションや美術館の歴史といった角度から検討することが柱となった国際日本学シンポジウム第2セッションでは、ジャポニズムや染織技術の歴史、デザイン、モード、あるいは明治時代以降の日仏関係といった様々な分野で研究を積む、大学の研究員や著名なテキスタイル・コレクションの責任者ら5名の発表者をお招きした。作品そのものに対する直接的な調査、あるいは文献資料の調査を通して行われている各々の研究は、互いに関連し補完するものであり、フランスにおける日本の織物の受容という問題について深い考察を促すものであった。ギメ美術館、パリ装飾美術館、ガリエラ美術館、ミュールーズ・プリント美術館、リヨン織物美術館といった大きな美術館に今日収蔵されている主要なテキスタイル美術のコレクションの紹介は、日仏交流におけるジャポニズムの黄金時代を解き明かすだけでなく、日欧関係という枠組みにおいて、こうした交流の誕生からその後の展開までの経緯を検証させてくれた。

深井晃子氏は第2セッションの開会にあたり、ジャポニズムにおけるテキスタイルとモードの位置について、非常に充実した歴史的概観を提示した。この分野における最も著名な専門家の一人としてこれまで積んでこられた研究の成果としての、この洞察力に富んだ歴史的概観によって、我々はセッションのテーマの核心に入り、このテーマの射程を測り、そしてフランス、またはヨーロッパでの日本の織物の発見と普及における、ジャポニズムと日本美術愛好家らの存在の重要性を認識することとなった。

また、やはりジャポニズムという研究分野において、高木陽子氏はヨーロッパにおける日本の染型紙のコレクションに焦点を当てた。2006年末フランスのパリ日本文化会館において、この染型紙についての興味深い展覧会が開かれ、馬淵明子氏、長崎巖氏と共にその監修に当たった高木氏は、展覧会の内容と、フランスのみならずヨーロッパの多くの国々において現在進められている染型紙の研究の現状についての貴重な情報を提供した。

ギメ美術館研究員のオーレリー・サミュエル氏は、多くの図を示しながら行った興味深い発表の中で、クリシュナ・リブー女史が世界でも類を見ない織物コレクションを形成し、それを後にギメ美術館に寄託し、また1979年にアジア織物調査研究協会(AEDTA)を設立したことの根底にある技術面への関心とその研究方法を取り上げた。日本の作品に関しては、19世紀末以降日本美術愛好家らが集めた貴重なコレクションから一部譲り受けたこの見事な、しかしまだほとんど知られていないリブー・コレクションは、地理的にも、またその意味合いからも、ジャポニズムという範疇を越えるものである。これらの作品の持つ明白な装飾的、美学的特性の向うに、クリシュナ・リブーはアジア全土における織りの技法の分析と、日常的、あるいは宗教的な場面における多様な利用法の調査によって、これらの織物に込められた文化的、宗教的、社会的、さらには民族学的な情報を明らかにしたのである。

日本と同様にフランスにおいても、織物職人が19世紀末に浮世絵師らの芸術的獨創性にしばしば影響を受けていたように、20世紀の流行において織物の製造は、場合によっては純粹に美学的、装飾的次元から離れ、別の内容、別のメッセージを反映し広めた。こうしたメッセージ媒体、印刷物としての役割について、円谷智子氏は、パリのガリエラ美術館に所蔵されているスカーフコレクションの装飾やモチーフの分析を通して考察した。円谷氏は非常に刺激に満ちた日仏の比較から、1930年代フランスにおける織物製造を方向付けた、製作の新しい形態、主な社会政治的出来事、デザインの着想の源に着目し、それらの芸術性の向う

にある機能、メディアとしての有効性を認識させてくれた。

廣瀬緑氏は更紗の歴史に関する非常に興味深い考察を通して、ジャポニズムより遥か昔、オランダ東インド会社によって 17 世紀から広まっていたこのインド生まれの織物が、極東とヨーロッパに同時にもたらされ、ヨーロッパでは大きな成功を収め、地方に大きな工場が設立されたことに着目した。またこの考察で廣瀬氏は多くの貴重な資料を使って、染織生産を特徴付けた流通の地理的広がりや歴史の古さを重視し、ジャポニズムという背景のもと 19 世紀に飛躍した日仏のテキスタイル交流がさらに広い視野で捉え直された。

今回のような交流という複雑な問題にからむ広範なテーマを前に、当然のことながら多くの課題や、試みるべき研究が残ったが、時間の制約と全体の一貫性を考慮し、本シンポジウムではすべてを扱うことはできなかった。しかし、今回のこうした新しく豊かな問題提起と取り交わされた情報、そして国境を越えた多くの出会いが、近い将来に実りある続編へと発展していくことを期待している。最後に、素晴らしいサポートをして下さった古瀬教授をはじめお茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラムのスタッフの方々、オーレリー・サミュエル氏の原稿の翻訳して下さいました梶浦彩子氏、そして、本セッションの企画運営に多大なご協力と貴重なご意見を下さり、また活気に満ちた討論パネルの進行役をして下さった秋山教授、並びに徳井教授に心から感謝を申し上げます。

【文責：本学准教授 ロール・シュワルツ＝アレナレス】

